

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名:加藤真奈 所属:山口県立田布施総合支援学校 記録日:2022年2月11日
キーワード:やりとり コミュニケーション 自閉症

【対象児の情報】

- ・学年 小学部4年
- ・障害名 知的障害 自閉症
- ・障害と困難の内容
 - ・会話中に、聞き返されると、「わからん、難しい」と言って、会話を強制終了させてしまう。
 - ・相手に話しかけても気づいてもらえなかったり、会話中に意味が伝わらなかったりすることが多い。
- ・使用した機器
 - iPad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

- ・当初のねらい
 - 本児にとって楽しく簡単な方法で友達や教員と関わるができる。
- ・実施期間 2021年4月～2月
- ・実施者 加藤真奈
- ・実施者と対象児の関係 担任教員

【活動内容と対象児の変化】

◎対象児の事前の状況

- ・2、3語文程度のやりとりが可能。
- ・発音がやや不明瞭なところがある。早口で流れるように話す。
- ・担任は、持ち上がりであり、児童自身のことをよく知っているのので、何を言っているかわからない、ということはほとんどない。担任以外の教員にとっては、話の流れの中で推測して聞き取れるが、突然話しかけられたときや、教員側がよく知らない内容については、聞き取ることが難しいそうである。
- ・友達や担任以外の教員に自ら話しかけることはあまりない。話しかけても気づいてもらえないことの方が多い。
- ・うまく伝わらなかった時や聞き返しをされたときに、「わからん、難しい」と言って話すのを止めてしまう。
- ・自宅でオンラインゲームをするときに、チャットをよくしているそうである。相手に意味が伝わらず「どういうこと?」といった聞き返しをよくされているそうである。
- ・保護者に、児童のことで困っていることはないか尋ねたところ、「(児童が)何を言っているかわからないことがある。」とおっしゃっていた。

◎活動の具体的内容(★…気づき)

① 児童が使っている言葉の実態把握

- ・『えにっき』と50音キーボード(次ページ図1)、『GoodNote5』とApple pencil、紙と鉛筆 の3種類の児童が書いた文章を比較した。



★書いた文章の量に差は見られないが、本児に「どれでやりたい?」と聞くと、『えにっき』と50音キーボードの組み合わせ

せを選ぶ。『えにっき』の文字の大きさの調節が簡単で書きながら文章全体を見やすいこと、挿入した画像を見ながら書くので、書きたいことが浮かびやすい、というのがいいのではないかな。

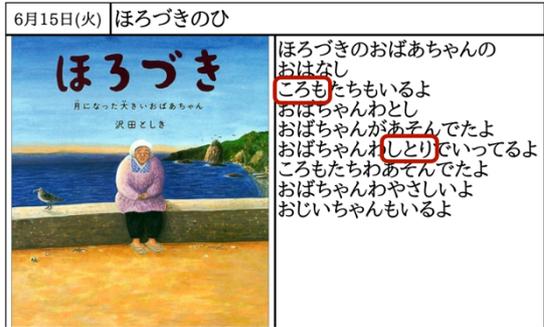


図1：『えにっき』と50音キーボードで書いた文章

- ★文字を書くときに、文字が思い出せないこともたまにある。そのとき、「け」だと「かきくけ」など唱えて思い出している様子。
- ★「らいおん」→「だいおん」など、覚え間違えている言葉が多数ある。特に「ら」と「だ」、「り」と「ぎ」、「れ」と「で」、「ひ」と「し」、「な行」と「ま行」が入れ替わることが多い。

② 言葉を正しく覚える

(1) Finger Board (図2)

・教員と友達の名前について、タイピングゲームのような電子教材に取り組んだ。



図2：名前のタイピングゲーム

- ★画像と文字がどちらも表示されていると、言葉を覚えやすいようだった。
- ★教員と友達の名前を覚えることで、「名前を呼んでから話しかける」ということができるようになり、自分からのコミュニケーションが増えた。
- ★会話中に、近くにいる友達に会話を振ることが増えた。

(2) 例解学習国語辞典、Safari

・知らない単語について、国語辞典アプリで調べ、記録した。辞典の文章を読んで理解するのは、まだ難しい様子で、画像を登録する機能を主に使用した。



図3：例解学習国語辞典

- ・safariで画像検索し、例解学習国語辞典に登録した。(図3)
- ★予想に反して知らない言葉が多かった。
- ★「なす」など、名前は知らないが、画像を見ると、「畑で取った」「食べたことある」など、その物自体は知っていることが多かった。

③ 話している場面を振り返る

・会話や当番の発表場面などを動画で撮影し、振り返った。



- ★自分の動画を見るのは照れくさい様子。自分の様子を客観的に評価することも、まだ難しい。朝の会の司会では、直接的な指導がなくても、友達が褒められている様子を見て、声が大きくなっている。自分を振り返って改善していくよりも、よいモデルを目標にし、真似していくほうが児童に合っているのではないかな。

④ 様々な環境の中でのやりとり

(1) 『Amazon Echo (アレクサ)』

- ・休み時間の会話中に、Aちゃん、アレクサ、担任で会話した。児童の声をアレクサが聞き取ってくれるのか、確信はなかったが、お借りしている端末を試してみたいという担任の気持ちもあり、もし児童の音声がかたくなかったら、担任が代弁しようと思って、遊びの中で活用した。
- ・話しかけたり、好きな曲を流したりした。好きな食べ物や何時に寝るかといった質問を自分で考えて尋ね、回答を楽

しんだ。

★呼びかけに反応しているときに青のランプがつく仕組みが児童にとってわかりやすい。

★アレクサが聞き取ってくれる程度の明瞭さで話すことができる。好きな食べ物を尋ね、アレクサの答えを聞き取ることもできる。

(2) 感想文発表

・テレビ絵本の感想文を友達と発表し合う活動を行なった。

★友達に聞こえるように言うことはできるが、友達の感想を聞いて、「友達はなんと言っていた？」と聞くと、友達の感想と自分の感想を混同していることが多い。周囲の音によっては、ほとんど聞き取れないことも多い。

★自分の予想と異なることを聞き取るのが難しいのではないかと考えられる。

(3) 検索した画像を見せながら話す。

・最初は、児童の話していることを教員が汲み取って検索していたが、徐々に使い方に慣れ、自分で検索ワードを考えて検索できるようになった。画像を見せながら話す内容は、好きなゲームやアニメの話が多かった。

★画像を見せながらの方が、よりおしゃべりになる。

★友達と話す際も、画像を見せながら話すと、相手の言っていることを理解しやすい様子だった。(図4)



図4：好きなキャラクターについて話し中

(4) FaceTime でリモート授業

・担任が在宅勤務の日があったため、教員が自宅、児童が学校でのリモート授業を行なった。

★テレビ通話だと、「画面に映るように物を見せたり顔を見せたりする」「聞こえるように言う」と相手を意識した話し方をしているように感じた。



図5：チャットでのやりとりの様子

(5) DropStep + ByTalk(図5)

・文字やスタンプでのコミュニケーションをすることで、本児のペースでのやりとりができるようにした。

★チャットでのやりとりは、慣れているようで、文字もスタンプもすぐに使いこなしていた。

★学校では、チャットよりも、実際に会話をするほうを好んだことや、学校で本児が主に使っている一人一台端末のiPadでは、このアプリが使用不可だったことが要因で、頻繁に使うツールにはならなかった。



⑤ おたすけ言葉カード

・やりとりの中で困ることが予想される、「わからないとき」「聞こえなかった時」などの場面ごとに、使うとよい言葉をイラストと文字で例示した。練習のために、「おわりました」という、児童が既に使うことのできる言葉も一覧に入れておいた。(図6)

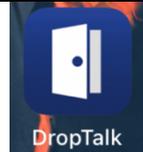


図6：おたすけ ことばカード

★困ったときは、これらの言葉の中からどれかを言えばいいと理解した様子。アプリの画面を見ながら、言葉を使うことを繰り返すうちに、「ちょっと聞こえなかったのよ」など、自分の言葉で伝えられるようになった。

◎対象児の事後の変化

- ・担任以外の教員や友達にも話したいことがあり、自ら話しかけることが増えた。
- ・会話の中で、伝えたい物の名前がわからない際には、「〇〇みたいなもの」と説明し、伝えようとするようになった。
(例)「ハムスター」→「ねずみみたいなもの」
- ・相手に気づいてもらえないときには、名前を呼ぶ、近づく、肩を叩く、などいろいろな方法を試す様子が見られるようになった。
- ・活動の説明を理解できなかったときに、「待って、もう1回言って」と自分で教員にお願いする姿が見られるようになった。
- ・話を聞いて理解することへの自信が付き始めたのか、言葉での説明を聞いて、周りの友達にも積極的に教えてあげようとする人が多い。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

>何がうまくいったのか？人に伝えたいエピソードを教えてください。

○やりとりをしたい内容、相手の広がり

年度当初は、自分から話しかけることがほとんどなかった他の学級の教員を探してまで話しかけることがみられるようになった。「キリンの好きな食べ物は何?」「月はなんで夜になると見えなくなるの?」などの質問をし、答えを聞いてくるようになった。

○「わからん、難しい」からの脱却

会話の中で相手の言っていることやなんと答えればいいのかわからない場面でも、自分なりの言葉で返事ができるようになった。ペットとしてハムスターを飼いだしたという話をしているときに、私が「ハムスターって何を食べるの?」と尋ねると、「『ハムスター 食べる物』って調べてよ!」と検索ワードを提示してくれるようなことがあった。

○自分から「今日いいもの持ってきたよ」

登校後すぐに、「今日いいもの持ってきたよ」と、iPad を差し出し、ペットのハムスターの写真を見せてくれた。新しくハムスターのカゴやその装飾を変えたことなどを嬉しそうに説明していた。友達から、「明日、動画撮ってきて」と頼まれた。「動画って何?」と聞き返し、動画の撮り方も友達から教わって、次の日、ハムスターが元気に走っている動画を友達に披露した。

○児童の様子の背景についての主観的な気づき

(指導開始時)

- ・早くやりとりを終わらせようとしている。
- ・聞き返されることについて、指摘されていると感じている。

(現在)

- ・相手の言葉を自分なりに理解しようとしている。
- ・やりとりを続けようという姿勢に変化した。
- ・会話中に、不安や悲しい表情をすることがほとんどなくなり、楽しみながらやりとりができるようになってきている。

>うまくいった理由と ICT の役割を教えてください。

ICT を使って、やりとりをする環境を自分で整えるための練習をし、ICT がうまくいかなかったときの補助となってくれる存在ができたことで、安心してやりとりができるようになった。

ICT を使うと、「画像」が素早く簡単に手元に表示できることが、効果的だったと考えられる。

>ICT を使わなかったらどうだったでしょうか？

ICT がなくても、少しずつステップアップしたと考えられるが、ICT の反復練習のしやすさ、画像の扱いやすさによって、児童の力がより発揮されやすくなったと感じている。

・エビデンス(具体的数値など)

○会話中に聞き返された際の様子

	指導開始時(4月)	現在(2月)
言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・「わからん、難しい」 ・何も答えず、相手の様子を伺う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「もう1回言って」 ・「ちょっと聞こえなかったのよ」 ・自分なりに返事を考えて答える。 (内容は質問の回答になってないことも多い)
行動・表情	<ul style="list-style-type: none"> ・不安そうな表情に変わる ・少し後退しながら、相手の働きかけを待つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表情は変わらない ・聞き取るうとして、相手に近づくことが多い。

・その他エピソード(画像などを含めて)

給食前に、私が「今日のケチャップはハンバーグにかけてください。ハンバーガーにしたい人は、パンに挟んだ後にケチャップをかけるのがおすすめです」と学級全体に説明した。話を聞いていない児童がおり、他の先生に、「今、加藤先生は何て言った？」と聞かれて答えられず困っていた。本児が「私が教えてあげる」と言うので、本児に聞くと、「ケチャップが苦手な人は、少しずつかけてもいいですよ」と、違う内容のことを自信満々に答えた。複数の教員から「Aちゃんも聞いてないじゃん」とツッコまれ、落ち込む様子はなく「ああ、そうか～」と言って笑っていた。このような自信満々に違う内容のことを話すことが何度かあり、「聞き取れる自分」に自信をもち、間違えてもいいから発信する力がついてきているのではないかなと感じている。

・来年に向けての課題

～新しい環境でも自分らしく過ごせるために～

- ・今年度の取り組みを、校内で共有する個別の教育支援計画や引き継ぎ書類に明記する。
- ・児童と共に今年度できるようになったことと、活動を結びつけながら振り返り、価値づけをする。